読売 教育ネットワーク

社会はまるごと学校――
すべての大人が先生です

読売ワークシート通信「ゾウのはな子 69歳に」で学習するセント・アンドリュース・インターナショナルスクール・バンコク日本語クラスの子供たち（同校提供、2・3面へ）

巻頭特集 バンコクの学校の47人 × 都立井の頭自然文化園

タイから贈られたゾウ **はな子の生と死 学ぶ** 2・3

「書く力」がテーマ 「大学の実力」調査まとまる 4・5

埼玉県立松山高校新聞部が「主権者教育セミナー」を取材し、学校新聞に特集 6

台湾で初めての「まわしよみ新聞」 7　千葉私立中学進学フェア 8

西南学院大学読書教養講座 9　お知らせ・短信 9　リレーエッセー 11

学校×企業 **仙台一高生・慶応大学留学生が読売新聞本社訪問** 10

2016.7
Vol.19

タイから贈られたゾウ

はな子の生と死 学ぶ

バンコクの学校の47人×都立井の頭自然文化園

タイの首都にあるセント・アンドリュース・インターナショナルスクール・バンコク（STA）の子供たちが6月2日、1分間の黙祷をささげた。目を閉じ、思いをはせたのは1週間前に東京都立井の頭自然文化園で死んだゾウの「はな子」。STA日本語クラスは今年2月から、はな子を題材に「人間と動物との共存」について学びはじめ、47人が書いたはな子への誕生日カードは今春、動物舎前に展示された。この学びと交流のきっかけは1月に配信された読売ワークシート通信だった。

子供たちが作った「はな子69歳バースデーカード」は4月1日から17日まで、動物舎前に展示された（都立井の頭自然文化園提供）

1月27日に配信された読売ワークシート通信「ゾウのはな子 69歳に」

「すごい、飼育員さんが返事を書いてくれた！」。はな子69歳の誕生日カードと質問カードを自然文化園に送ってから約2か月、飼育員からの返事が届くと日本語クラスから興奮した声があがった。

「体重が2800～3000kgあったころは毎日80～100kgのエサを食べていました」

「野生のアジアゾウは毎日200kgは食べます」

手書きの返事を何度も読んだり、隣の席の友達と見せ合ったり。子供たちの心は、はな子一色になっていた。

STAは思考力、判断力、表現力を磨くうえで、子供の母語を大切にする珍しいインターナショナルスクールだ。日本語クラスは週4回計140分の選択科目。4～11歳の6クラス47人を担当する森田清美さんは、2013年から読売ワークシート通信を授業で活用している。

その中で目に留まったのは1月27日配信のワークシート「ゾウのはな子 69歳に」だった。1949年にタイから日本に贈られたゾウと、タイで暮らす日本の子供たち。お互いに共通点があると思った。

◆「はな子」に誕生日カード

記事には3月にはな子の誕生会が予定されていると書かれており、「人間と動物との共存」を考える魅力的なテーマと映った。

手始めに2月上旬、6歳と7歳のクラスにワークシートを配ったところ、関心は高く、喜んで誕生日メッセージも書いた。

真剣に取り組む姿に心を打たれ、森田さんは自然文化園にメールを送った。「誕生会に合わせ、子供たちが書いたカードをはな子さんに贈りたい。気持ちを受けとめてもらえますか」

対応したのは教育普及係長の大橋直哉さん（42）。高齢のはな子は環境の変化に敏感なため、カードの展示などは約束できない。それでも、愛情をかけて飼育する動物を勉強してくれるのはうれしかった。飼育員らと相談し、「カードを送ってください」と返信した。

教室で勉強したことが現実の世界とつながる――。日本語クラスで「はな子プロジェクト」が始まった。教材はワークシートの記事と、飼育員らが文と絵を手がけた児童書『せかいいちばん手がかかるゾウ』（教育評論社）だ。

様々な試練を乗り越え、たった1頭で生きつづけるゾウは幸せか、かわいそうなのか。森田さんと子供たちは話し合いを重ね、はな子の感情を整理して視覚化したマインドマップ（心の地図）も作った。学習が進むと、病気や寂しいときには必ず飼育員がそばにいて、助けていることに子供たちは気づき始める。

もっと知りたいという好奇心が芽生え、戦争中に殺された上野動物園の動物について考えたクラスもあった。その理不尽さに「きよみ先生、戦争はきらいだ」と川成瑛仁君は憤った。

真剣な学びと熱い思いは大橋さんや飼育員を動かした。「異国にいながら本当に良く勉強している。はな子への理解も深い」。誕生日カードの展示が検討されることになった。

47枚の誕生日カードは3月25日、大橋さんの手元に届いた。動物舎前に掲示ボードを作り、4月1日から17日までカードを貼り出した。掲示しきれなかったカードもファイルに収められ、大勢の来園者が目にした。

質問カードにも飼育員4人が手分けして答え、バンコクに送った。5月中旬、その全てが授業で紹介された。

子供たちは授業で飼育員に手紙を書き始めた。

「うれしすぎて、もう今日の夜（は）ねむれな（さ）そうです。かんしんしすぎて、ばくはつしてしまいそうです」「生まれて、はじめてしょうらいのゆめがわかりました。しいくいんさんになることです」

あふれる言葉が原稿用紙を埋めていき、永田堅太郎君は「はな子がいつまでも元気でいられるようお願いします」と書き上げた。だが、授業の後、保護者から、はな子の死の知らせが届く。

数日後届いた大橋さんからのメールにはこう書いてあった。

「子供たちのカードをはな子に見せることができたのが救いです」「生きている動物は、いつかは死にます。子供に伝えるのは難しいかもしれませんが、よろしくお願いします」

読売ワークシート通信きっかけ 飼育員らと交流

◆ゾウの気持ちを色で表現

すぐに、「はな子の生と死」を考える授業が始まった。

低・中学年は、はな子と飼育員の気持ちを視覚化することに挑戦した。ビデオ教材「なぜゾウは決して忘れないのか」を見て、①ゾウの脳は高度に発達している ②優れた記憶力と感情がある ③群れの仲間の死を悼む、などを学んだ。

そのうえで、それぞれの気持ちを色付きの砂で表現する「心の瓶」を作った。

「死ぬ前は苦しくて不安で、寂しかったはず」。そう思ったジョシュア・ビルビー君は寒色系の色の砂を多く瓶に詰め、心にショックが広がったと想像した子はピンク色の砂を入れた。

授業の仕上げとして3つのクラスで行われたのは習字だ。

「日本人のアイデンティティーにつながる習字で、はな子のことを懸命に考えた記憶を文字として残そう」

筆に墨をつけ、半紙に向かって集中。一人ひとりが平仮名で「はなこ」と書いていく。6月15日、プロジェクトは終わった。

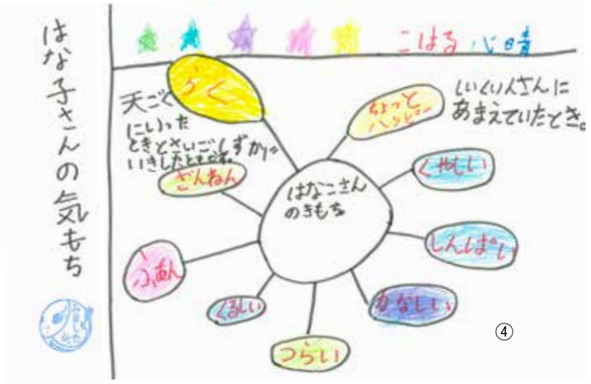
小さな新聞記事から始まったプロジェクトで47人は何を学んだのか。森田さんは「物事を様々な視点から捉えることの大切さに気づいた」と振り返る。

答えが決まっていない問題を考えるきっかけとなり、好奇心や疑問の心を持つことができた。今後もワークシートと新聞記事に注目していくという。

①飼育員の久保田夕紀子さんは漢字にふり仮名をつけて子供たちに手紙を送った

②飼育員から届いた手紙を読む子供たち

③「今の気持ちをどう伝えよう……」。飼育員へのお礼の手紙を下書き中



④はな子が死ぬときの気持ちを視覚化したマインドマップ

⑤マインドマップをもとに「心の瓶」を作る

⑥「天国でも飼育員さんと私たちを忘れないで」。6月2日、子供たちははな子を思い手を合わせた。

⑦プロジェクトの仕上げとして取り組んだのは習字だ

授業写真はセント・アンドリュース・インターナショナルスクール・バンコク提供

第9回「大学の実力」調査まとまる

読売新聞社の第9回「大学の実力　教育力向上の取り組み」調査の結果がまとまった。今回のテーマは「書く力」。近年、大学が「書けない学生」の存在を深刻に受け止め、文章の書き方を初歩から学ばせる取り組みを始めていることから設定した。調査では今回初めて、受験生に人気の医療人養成学部の実態も尋ねた。全746大学の91％、681大学の回答を得た。詳報は「大学の実力2017」（9月刊行予定）に掲載される。

多くの大学で「書く力」養成に本腰

書かせる工学部

調査では、「書く力」の養成を目指した必修授業の有無や、その授業でのリポート提出の平均回数、卒業論文・研究等を必須としているかなど、入学から卒業時までの取り組みを尋ねた。

その結果、最も「書かせている」学部は、工学部であることが分かった。回答した211学部のうち64％が「書く力」を養う必修授業を開設、平均で16回のリポートを書かせていた。また、95％で卒論等を課していた。

一方、文系では人文科学系の328学部のうち77％が「書く力」授業を必修化し、リポートは平均14回。卒論等は74％の学部が課していた。

学生数、学部数ともに全分野で最も多い社会科学系では、565学部のうち59％が必修授業を設け、リポートは平均9回。卒論等を課している学部は45％にとどまった。

社会科学は、もともと教員1人あたりの学生数（ST比）が平均37人と全分野で最も高い。大半を占める私立の平均は41人にも上っていた。教員1人当たりの担当授業数は六つ以上と負担が大きく、添削指導などを伴う「書く授業」の実施が難しい状況が浮き彫りになった。

（右）東京都八王子市の創価大学では、「書く力」を鍛える授業「学術文章作法Ⅰ」が1年生の必修として行われている

（上）「学術文章作法Ⅰ」に取り組む学生の手元には、書き込みの入ったフローチャートが

「書く力」は学びの軌跡

「書く力」は、単なる文章表現技術ではない。好奇心を燃やし、書を読み、他者の話を聞き、頭の中で整理して構成する。そこで得た知識が文章を磨く。読み手のことも考えなければいけない。どんな言葉を使うか、社会性も必要だ。読みやすいよう、リズム感も要る。鍛錬にはパソコンではなく、手書きが有効だ。

「国境の長いトンネルを抜けると……」で知られる「雪国」の推敲（すいこう）に、文豪・川端康成は十数年をかけたと聞く。文字として残すものに責任を持つ。書く力には、その気概も込められている。

高大接続改革は「書く力」を問う。そこに一人ひとりの学びの軌跡が詰まっているからだ。

安西祐一郎
高大接続システム改革会議座長

偏差値より教育力で選ぼう
「大学の実力　教育力向上の取り組み」調査

受験生に、偏差値や知名度ではなく、教育の中身で志望大学を選んでほしいと、読売新聞社が2008年に始めた調査。偏差値は、大学教育の中身と全く関係がなく、ここ10年で大きく変わった教育内容を知ってもらうのが目的だ。

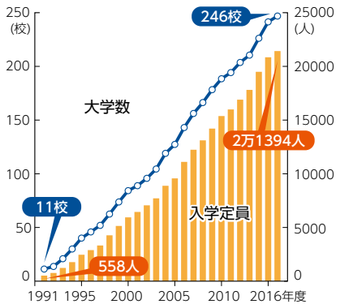
今回のテーマ「書く力」は、高大接続改革※の「核」。社会に出てからも求められる力を養うため、大学がどのような取り組みをしているかを中心に尋ねた。在学4年間（医歯学部などは6年）を具体的にイメージできるよう、退学率や留年率なども調べた。

調査は、大学教育や経営、高校の進路指導の実態に詳しい大学・高校の教職員計10人で構成する「大学の実力検討委員会」に、質問項目の設定から回答分析まで幅広く助言を求めて行っている。

※高大接続改革　高校と大学の教育、その間の入試を抜本的に見直すもの。答えの選択肢が並ぶ大学入試センター試験が2020年、「自分で考えて書く」内容に変わる。

		4年制 全体	入試方法別 一般	AO	指定校	公募	付属	留学生	その他	6年制 全体	入試方法別 一般	AO	指定校	公募	付属	留学生	その他	ST比（人）
全体		7.2	5.7	13.8	8.0	7.5	6.8	14.6	10.6	6.7	5.9	13.8	10.5	5.8	7.2	21.1	13.6	
国立		2.9	2.8	3.1	0.0	2.6	0.0	5.4	8.8	2.0	2.3	0.9		0.9		10.0	0.0	
公立		3.9	3.8	8.2	4.0	3.2	2.0	5.7	11.3	3.1	3.4	0.0		0.0		100.0		
私立		8.4	7.0	14.5	8.0	9.2	6.9	16.3	10.7	9.3	8.5	19.8	10.5	8.2	7.2	25.0	15.0	
学部分類別	人文学	7.3	6.1	14.0	7.3	8.0	6.5	15.2	9.9									26.9
	社会科学	7.4	5.9	15.3	7.1	8.5	5.4	15.1	12.1									37.0
	理学	6.7	5.9	10.8	9.2	8.4	6.6	6.3	22.6									12.9
	工学	8.8	6.6	16.8	12.2	9.5	12.4	11.7	12.4									19.2
	農学	4.3	3.6	7.5	5.1	5.2	6.3	11.5	7.6	4.0	4.8	0.0		1.7	2.6		0.0	14.0
	医学	3.0	3.3			2.3				2.0	2.1			1.0				2.1
	歯学	1.2	1.5	0.0		0.0				9.0	10.0	7.8		5.8				4.2
	薬学	6.1	5.2	8.3	14.3	7.0	0.0	0.0	0.0	10.8	10.1	22.7	11.3	9.3	8.1	42.9	18.4	17.5
	保健・看護	6.5	5.1	13.1	9.2	6.4	11.6	2.8	7.3									11.8
	家政	5.5	4.6	9.0	5.8	5.0	3.7	23.0	10.3									21.3
	教育	3.6	2.7	7.9	5.8	3.7	4.1	11.8	3.6									16.3
	芸術	10.2	8.3	14.4	11.4	8.6	10.1	16.5	12.0									18.0
	体育	7.4	4.6	11.0	10.8	6.3	6.8	20.0	7.1									28.1
	その他	6.7	5.4	12.3	5.8	7.1	6.3	16.5	9.4	0.0	0.0							18.7

◆入試方法別入学者の退学率
調査では、2012年（4年制）と2010年（6年制）に入学した各学部生のうち、退学者数を入試方法別に聞いた。AO入試で入学した学生の退学率は4年制、6年制とも13・8％で、各種の推薦入試（指定校、公募、付属・系列校）より高く、全体平均の2倍前後に上った。



◆看護系大学数及び入学定員の推移

歯・薬学部　高い留年・退学率

今回の調査では初めて、医療人養成学部を対象にした質問を設けた。医・歯・薬・看護学部は「不況に強い」「食いっぱぐれがない」と受験生に根強い人気だが、いずれも難題を抱えることが分かった。国家資格に直結する学部に入れば将来安泰、とは必ずしもいえないようだ。

看護学部急増で教員不足

看護師養成の学部・学科は全国に246大学ある。11大学だった25年前の22倍、入学定員は38倍に増えている。

看護師不足を受けて、国が1992年、看護師等人材確保促進法を制定したことがきっかけだ。少子化で18歳人口が減少し、大学が生き残り策を模索していたことや、その前年の大学設置基準緩和で、大学・学部の新設が容易になったことも追い風となった。

学部の急増により国が問題視するのは教員不足だ。よりよい給与や地位を求めて別の大学に移る教員の「渡り」と呼ばれる現象が広がり、「年中、求人を出している」とこぼす大学関係者が少なくない。学期途中で教員が他大学に移るため、授業の継続も難しいという。それだけに、進路選択は慎重さが必要となる。

進級のハードル上げる

薬学部（6年制）は、退学率の高さが問題となっている。とくにAO入試による入学者の退学率は22・7％に達する。背景にあるのは、ここでも学部の急増だ。少子化で学生確保競争が激化する中で規制緩和が行われ、受験生の人気を集めそうな薬学部開設に文系の大学も新規参入。2003年以降、薬学部を有する大学数は従来の46から74に急増した。中には、受験生確保のために、薬学部の学習に必須の「理科」を入試科目から外す大学もある。

留年率を見ると、歯学部が24・9％、薬学部は21・3％だった。大学ごとに公表される国家試験合格率を下げないよう進級のハードルを上げたために、留年者が増えている。

医学部にグローバル化の洗礼

医学部はグローバル化に直面している。米国は2010年、世界保健機関（WHO）の下部組織等が定める国際基準に達しない医学部卒業生を23年から臨床研修生として受け入れないと決めた。日本の医師国家試験に臨床試験はないが、基準を満たさなければ米国で研修できないだけでなく、世界に通用しない医学部と見なされてしまう。

今回の調査では、国公立を中心に実習時間のうち9割以上を実際に患者を診察する参加型実習に充てている大学が目立った。グローバル化を見据えた対策と言える。

交代で患者役を務めながら、看護の実習をする聖路加国際大学看護学部の学生（右の2人）

18歳の1票

読売新聞主催「主権者教育セミナー」を取材

埼玉県東松山市の県立松山高校の新聞部員が、6月4日に読売新聞東京本社で開かれた「主権者教育セミナー」などを取材、「18歳の意思を一票に　選挙に行こう」と題した特集にまとめ、7月9日発行の「松山高校新聞」第288号に掲載。同日、全校生徒に配布された。特集の取材などを通じ、部員たちは政治に関心を持つことの大切さを学んだ。

「松山高校新聞」の校正作業に取り組む松山高校新聞部員ら

埼玉県立松山高校　学校新聞で「18歳選挙権」を特集

全校アンケート調査 66％が「投票に行く」

松山高校の新聞部員は、3年生2人、1年生2人の計4人。第288号の発行日は18歳選挙権が初めて全国で実現する参院選の直前にあたるため、投票を呼びかける特集を組むことに決め、準備を進めてきた。

その手始めに取材したのが、「主権者教育セミナー」。投票する候補者を選ぶにあたっての講師のアドバイスや、パネルディスカッションに参加した大学生や高校生の生の意見を丁寧に記事にまとめた。

その後、校内で選挙に関するアンケート調査を実施。選挙権のある3年生101人に参院選の投票に行くか尋ねたところ、「必ず行く」が26％、「行くつもり」が40％との回答を得た。また、政治に関心があるかどうかの割合は、3年で「大いにある」「ある程度ある」が計62％、1、2年でも59％に上った。これらの調査結果も円グラフにして掲載した。

さらに、埼玉大学で6月20日に行われた立候補予定者（当時）の公開討論会にも出向き、予定者の生の声を公平に紹介した。埼玉選挙区の立候補予定者は7人だが、この日参加したのは野党のみの4人。他の3人がなぜ討論会に出席できなかったのかを記事にする配慮も見せた。

特集ではこれらのほか、候補者7人の略歴や公約とともに、総務省HPから引用した選挙運動・政治活動での禁止事項についても収録するなど、実際に投票に行く生徒に役立ててもらおうという工夫が随所にみられた。

3年の鈴木友捷君は「取材を終えて」の中で「身近な問題から考え、その問題について各党の考え方を比べることから政治への意識が高まることを学んだ。今後の政治の動きを欠かさず確認していくことが大切だと実感した」とつづった。

腕章をつけて「主権者教育セミナー」を取材する松山高校の新聞部員たち（前列の3人）

「投票に行ってほしい」「家族で政治の話題を」

今回の取材を通じ、部長の野寺正純君は「校内で政治問題が話題になることはほとんどないので、松高生の政治に対する関心が意外に高いことに驚いた」と率直な感想を口にし、「自分は残念ながら誕生日が1週間遅くて、今回の参院選には行けないけれど、若者の考えが少しでも政治に反映されるようになるためにも、選挙権のある生徒にはぜひ投票に行ってほしいと思う」と期待を込めて語った。

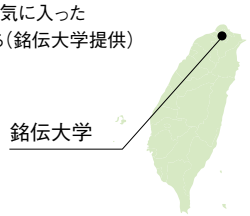
また、1年の田中秀明君は「この新聞を保護者の方にも読んでもらい、家族で政治の話をしてほしいと思う」、同じく1年の山内陽太郎君も「この記事で、みんなも政治に興味をもってもらえたらうれしい」と、それぞれ話していた。

顧問の内田さい子教諭は「今の時代、生徒も教師も忙しく、自分のことをこなすので精いっぱい。でも、取材に同行することで、立ち止まって考えることができた。記事を読んで、生徒たちはいろいろと考えてくれると思う」と特集のできばえに手応えを感じていた。

台湾北部の桃園市にある銘伝大学の応用日本語学科で今春、日本語学習の一環として「まわしよみ新聞」の授業が行われた。試験的な実践だったが、学生たちの反応もよく、担当の許均瑞副教授は「今後は学期ごとに3～5回、取り組んでいきたい」と意気込んでいる。

台湾の銘伝大学で「まわしよみ新聞」

「まわしよみ新聞」の授業で、気に入った新聞記事を切り抜く学生たち（銘伝大学提供）



「日本語学習に役に立つ」学生から大反響

「まわしよみ新聞」は大阪の街づくりプロデューサー、陸奥賢さんが考案した、新聞を使ったグループワーク。仲間同士が新聞を持ち寄って、それぞれ気に入った記事を切り抜き、その面白さを語り合う。その後、切り抜きを自由なレイアウトで配置し、新たな見出しやイラストを加えて独自の壁新聞を編集する。通常はいくつかのグループに分かれて取り組み、それぞれが完成させた壁新聞を発表し合って、出来栄えを論評し合う。

同学科では、今年3～5月、4年生41人が11グループに分かれ、読売新聞などを使って「まわしよみ新聞」の制作にチャレンジした。今年1～3月に発行された読売新聞計80ページなどから記事を選び、どれをトップニュースにするか、どんな見出しにするかなどを約2か月間かけて議論し、グループごとに完成させた。

学生からは「この活動を通じて新しい日本語の単語を習得できた」「他人が興味を持つ記事について話が聞けて楽しかった」「社会に出てからも仲間同士で楽しめそう」などの声が上がった。

許副教授も「新聞をじっくりと読む習慣を身につけてもらうきっかけになる上、プレゼンをする際の自信を養う効果も期待できる。学生自らが記事を選択するので、取り組みへの意欲も自然に高まる。これから社会へ出て行く学生にとって、非常に役に立つ」と評価している。

「まわしよみ新聞」は全国的に広がりつつあるが、海外での活動は珍しい。考案者の陸奥さんは「日本語教育に取り入れられるとは思ってもみなかった。現在の日本を知るには新聞がいい教材になる。今後もぜひ取り組んでもらえたらうれしい。活字離れは日本ばかりでなく世界的に進んでいるので、全地球的に紙の新聞の良さを見直すきっかけになってくれれば」と期待している。

出来上がったまわしよみ新聞の一例（銘伝大学提供）

「読売ワークシート通信」も活用

許副教授は、読売新聞記事を題材に国語や社会、英語など様々な科目を学ぶ「読売ワークシート通信」にも注目。自身の講義にも取り入れるなど、日本や台湾の新聞を使ってユニークな日本語教育を実践している。

5月には、ワークシート通信を活用した日本語学習教材「新聞日語（ニュースの日本語）」（台湾・五南図書出版）も出版しており、今回の「まわしよみ新聞」授業の実践についても論文にまとめ、台湾の学会や研究誌で発表する予定だ。

「読売ワークシート通信」を活用した日本語学習教材「新聞日語」

千葉私立中学進学フェア開催

講師の酒井さん（右端）とともに、為替レートが上下するゲームを楽しむ小学生たち

千葉県内の私立中学校の魅力を紹介する「2016千葉私立中学進学フェア」（千葉県私立中学高等学校協会主催、読売新聞東京本社など後援）が6月19日、千葉工業大学津田沼キャンパス（千葉県習志野市）で開かれ、私立中学への受験を考える親子約4000人が参加した。親子たちは目当ての学校の個別相談会や説明会を回り、各会場では活発な質疑が交わされた。特別プログラムとして、野村ホールディングス（HD）と読売新聞社の出前授業も行われた。

野村ホールディングス（HD）　輸入ゲームで円高・円安を体験

「今日は100兆ジンバブエ・ドル札を持ってきました」――。野村HDの講師、金融リテラシー推進課の酒井賢一さんは、かつてアフリカのジンバブエで流通していた超高額紙幣を1枚取り出し、目の前の親子44人に手渡した。

紙幣の桁を数えて目を丸くする子供たち。「ジンバブエでは物の値段が上がるインフレがひどくて、お札を刷って、刷って、こんなお札まで登場したんですね。で、このお札の価値がどれぐらいあるかというと、3枚で1円です」と酒井さんが伝えると、「え～」「信じられない」という声が相次いだ。

教室の注目を一気に引きつけ、「さあ、今日の授業のテーマは為替。国ごとに異なる通貨があり、それぞれの通貨は比率を決めて交換されています。それを為替レートと呼びます」と話しはじめた。

授業は子供たちとやりとりを繰り返しながらテンポよく進む。

「1ドルは何円か分かる？」「103円！」と手を挙げて正解を出した小学4年の男の子には「すごいね。君は証券会社に入れるよ」と当意即妙に応じる。

笑いが沸きおこるなか、紙芝居風のボードを使って為替のしくみを分かりやすく解説。他国通貨と比べて日本の円の価値が高くなることを「円高」、反対に他国通貨と比べて円の価値が低くなると「円安」だと説明した。さらに日本で外国の商品を買う会社は「円高になると有利、円安になると不利」と付け加えた。

最後は、これまで勉強したことをゲームで体験。子供たちは米国のお菓子を買う輸入業者役になり、2つのサイコロを振って出た目の合計で円高になったり、円安になったりするゲームに挑戦した。円の価値の高低を疑似体験した子供たちは「もっと円高になるのを待てばよかった」「輸入するタイミングが難しい」などと話していた。

野村HDの出前授業後、為替レートを特集した読売中高生新聞を熱心に読む小学生たち

読売新聞　新聞を使って学習しよう

読売新聞の出前授業では、読売新聞東京本社教育ネットワーク事務局の小屋敷晶子記者が約50人を前に新聞の読み方や、新聞が学習に役立つことを説明した。このほか、安田教育研究所の安田理代表が「グローバル化時代の子育てと中学受験」と題して講演。市進学院による講演「効果的な学習法と合格までの過ごし方」も行われた。

小屋敷記者（左端）に、面白いと思った中高生新聞の記事を説明する小学生

西南学院大で読書教養講座

ヤマザキマリさん講演

「想像力と言語が大事」

漫画家のヤマザキマリさん＝写真右＝を講師に迎えた「西南学院大学読書教養講座」（活字文化推進会議など主催）の公開授業が6月18日、福岡市の西南学院大学チャペルで開かれ、約400人が聴講した。

読売新聞社が進める21世紀活字文化プロジェクトの一環。ヤマザキさんは、1997年デビュー。映画化もされた「テルマエ・ロマエ」などで知られ、今年3月には、芸術選奨文部科学大臣新人賞を受賞した。

第一部の「ニルスから貰った力」と題した講演では、「ニルスのふしぎな旅」など幼少期からの豊富な読書体験を紹介。「表現者として大事にしているツールは想像力と言語。想像力が欠落すると、人間社会もあつれきを生みやすくなる。その欠落を補う最も身近な行為が読書ではないか」と語った。

第二部では国際文化学部の山田順・准教授のゼミ生とトークセッションに臨んだ。学生から、大ヒットした「テルマエ・ロマエ」を書こうと思った経緯について尋ねられたヤマザキさんは「お風呂に入るのがすごく好きだったのに、海外生活が長くてなかなかお風呂に入れない生活を送っていたとき、風呂に入っているおじいさんの絵を描くと風呂に入っている疑似体験が出来る。そんな単純な理由で最初は描き始めたが、執筆を続けていくうちに、お風呂というツールを使って、今まで敷居が高いと思っていた古代ローマが、どんなに日本に近いものなのかを分かってもらいたくなった」と語った。

News

151校が読売新聞、ジャパン・ニューズから出題

2016年度大学入試で、読売新聞と英字紙ジャパン・ニューズの記事が243件取り上げられたことが、読売新聞と学研教育みらいの調査（2016年7月8日現在）で判明。この調査の結果と分析をまとめた冊子が7月に発行された。

出題したのは、弘前大、広島大、大阪府立大などの国公立大のほか、青山学院大、関西学院大、慶応大、立命館大、早稲田大などの私立大や短大も含め151校。科目別では、英語が前年度より大幅に伸びて117件、次いで小論文が74件だった。注目を集める18歳選挙権などに関する記事は、12校で使用された。

冊子では、授業での新聞活用を模索する先生向けに、新聞を使ってディベートを行っている都立国際高校の授業も紹介している。冊子希望者は、

①郵便番号、住所、氏名を書いた紙片（あて先として封筒に貼ります）、②冊数（1人3冊まで）、電話番号を書いた紙、③送料分の切手（2冊まで140円分、3冊は205円分）を同封し、

〒100-8055（住所不要）読売新聞東京本社
教育ネットワーク事務局「大学受験は新聞から」係へ。

『大学入試改革』中央公論新社から刊行

読売新聞教育部は「大学入試改革　海外と日本の現場から」（中央公論新社）を刊行した。新聞連載などに大幅加筆したもので、国内外の大学入試の最新事情を伝える1冊となっている。

米国では、世界のトップを走るハーバード大、マサチューセッツ工科大などを取材。高校での実績を記した書類や面接などにより、専門職員らが生徒の「潜在力」まで見極める選考方法や、「入学後、大学や社会に貢献する人材」を評価する狙いなどを聞いた。貧困による格差に配慮した共通テストSATの改革や、大学での学びにつながる高校の授業も取材した。

ペーパーテストが主流だった韓国、台湾では、人物重視の米国型入試への転換が急速に進む現状をルポ。改革にはグローバル社会への対応に加え、地方と都市との格差を是正する目的もあるという。

日本でも2020年度に向け、大学入試センター試験に代わる「新テスト」の実施が予定されている。文部科学省は各大学の個別入試について、新テストの成績を活用した上で、米国式の多面的選抜に転換するよう促している。本書では、こうした改革の検討状況を詳しく解説したほか、東大、京大が初めて導入した推薦・AO入試や、私立大、地方の国立大のユニークな取り組みなどもデータや写真を交えて紹介した。

保護者や教育関係者に役立つ情報が満載されているだけでなく、大学入試のもつ意味や社会に与える影響などを幅広く考察している。

288ページ、税別1500円。

読売新聞本社訪問

選挙制度改革についてインタビュー

参院選投票日目前の7月7日、宮城県仙台第一高校の2年生5人が読売新聞東京本社を訪れ、調査研究本部の舟槻格致主任研究員に約1時間にわたってインタビューした。

舟槻主任研究員（左端）に熱心に質問する仙台一高の生徒たち

仙台一高2年生が校外研修

同校では2年次に、班を作り、テーマを決めて、一泊二日で東京の大学や研究機関を訪問する「校外研修」を行っている。来社したのは、狩野陽平君、千葉初陽君、山本勝汰君、高松航希君、深瀬啓太君。5人の研修課題は「日本の選挙制度改革の現状や問題点について研究機関やマスコミ各社の考えを調査研究する」ことで、事前にいくつも質問を送ってきていた。

一票の格差について5月に成立した改正公職選挙法をどう評価するかと質問したのは、班の代表の狩野君。「アダムズ方式」の内容もきっちりと調べてきている。「なぜ一票に格差があってはいけないと思う？」と、舟槻主任研究員は根本から考えさせる質問を返しながら、判例や諮問機関の答申も踏まえ、わかりやすく回答。定数をめぐる選挙制度改革に時間がかかる理由については、「受験生が試験制度を決めるとしたら、得意科目の配点など自分に不利にしたくはないよね」と、入学試験に例えて説明した。

このほか質問は多岐にわたった。選挙公約とその後の政策に乖離（かいり）が生じるのはなぜか、現在の選挙制度は死票の問題もあり、民意を反映していると言えるか。全員2年生なのでまだ選挙権はないが、どの質問も資料を調べ、よく考えた跡がうかがえた。舟槻主任研究員は、政治部のデスクとして国政選挙の報道に臨んだ経験を生かして丁寧に答えていった。

選挙権年齢の引き下げについても意見交換し、高校生たちからは、「子どものころから政治に関心を持ちやすくなる」という期待や、「投票率の高い高齢者向けの政策が行われると、若年層との投票率の差がさらに開くスパイラルになる」といった考えも出た。

狩野君らは「新聞記事など、資料をたくさん示して説明していただき、勉強になりました」と満足気だった。

編集局を見学するフィリピンの留学生ら（右の4人）

慶応大学のフィリピン留学生も

英字新聞部長と懇談

フィリピンから慶応大学に留学している学生3人も7月15日、読売新聞東京本社を訪れ、編集局などを見学した後、林路郎・英字新聞部長と懇談した。

来社したのは、アテネオ・デ・マニラ大学コミュニケーション学部4年の、カステロ・アマンドさん、ラオ・キーキャさん、スワゾ・ジュリアーンさん。慶応大学の学生2人も同行した。

この日は、編集局や展示コーナーをガイドに従って見学。新聞制作の工程を紹介した映像を見た後、英字新聞部を訪問した。事前に質問を受け取っていた林部長は、読売新聞が発行する英字紙ジャパン・ニューズの概要や編集方針、部の体制などについて説明。学生たちは、新聞を広げながら熱心に聞き入っていた。

ラオさんは「ニュースをどのように価値判断し、どのように新聞ができるのかが分かって興味深かった」と感想を述べ、スワゾさんは「部局を問わず、多くの人々が一日中、新聞づくりにかかわっていることを知り、改めてジャーナリストの仕事は大変だと思った」と話した。

海外で学ぶ・リレーエッセー⑲

米マウント・ホリヨーク大「大学で出会った魅惑のパズル」

湘南白百合学園高校（神奈川県）卒、米マウント・ホリヨーク大1年　久保田（くぼた） しおん さん

今日は、あるパズルをご紹介しようと思う。

私は、リベラル・アーツ・カレッジの女子大、マウント・ホリヨーク大学（MHC）に入学し、物理を専攻している。趣味のフルート演奏に物理が大きく関わっていることに気づいたのがきっかけだった。MHCは米国東部の名門女子大7校「セブン・シスターズ」では最初に開校した大学だ。

その7校は、かつてはほとんどが男子校だったアイビー・リーグの女子大版だが、当初はMHC進学に満足していなかった。いくつか受験した他の大学は補欠や不合格で、ここしか選択肢がなかったのだ。だが、理系科目に興味を持つ女子への教育に特化しているというのが唯一の救いであった。例えば、教授は学生の学問への熱意を汲み取ると、その学生を研究助手として雇ってくれる。

一人の物理学教授は、非ニュートン流体の一つ「ウーブレック」に関する研究を発表するため、私を研究助手にしてくれた。ある日のミーティング後、私たちは哲学的な話をしていた。

私は、我々のすべての行動は物理学の法則によって決まっており、法則の束縛から逃れられない、という考えを述べた。物理学が我々を完璧にコントロールしていると思っていたからだ。教授も同意してくれると思ったが、そうではなかった。ただ、黙ってしまったのだ。次の言葉を落ち着かない気持ちで待った。やっと口を開いて彼女は「映画を見ましょう。気に入っているのよ。あなたも好きになるわ」と言った。驚く私をよそに彼女が見せてくれたのはヒッグス粒子発見に関するドキュメンタリーだった。

ヒッグス粒子とは素粒子物理学の「標準理論」を証明するのに必要な、最後に発見された情報の断片である。もしこの理論が証明されなかったら、これまで築き上げてきた物理学の法則が瓦解してしまうのだ。そして幸運にもヒッグス粒子は発見され、理論は証明された。

衝撃だった。「物理学」と呼ばれるこのパズルの数々の断片がどのように美しく結びついているのかを見せられて、私は畏怖の念に打ちのめされた。しかし同時に、まだ私たちはパズルのピースの存在を知ったに過ぎず、その役割は分かっていない、ということも知った。このパズルを完成させるには、まだ足りないピースがあるのだ。

人類の不完全さ――単純な概念だが、これは私が物理を学ぶ動機のコアとなった。それまでは物理学において実現されてきた成功を鑑賞し、人類としての優越感を楽しんでいた。しかし今は、人類の無知を受け入れ、パズルを完成に導いてくれる新たなピースの発見を夢見ている。

当初は納得できなかった受験結果も、このパズルを解くためには必要不可欠なピースとなり、さらなる新たなピースを発見する旅立ちへの準備は今、整った。この旅は、巨大なパズルを解いていくために、一生続いていくのだ。

（会報編集部抄訳 The Japan News 2016年1月29日）

大学の友人と久保田さん（中央）＝本人提供

米マウント・ホリヨーク大

1837年創立の米マサチューセッツ州サウス・ハドリーにある私立の女子大。学生数は2189人で出身国は74か国（2016年6月現在）。留学生は約4分の1。

海外留学を目指す高校生に進学支援を行っているNPO法人「留学フェローシップ」のメンバーが、海外のキャンパスライフをリレー連載します。留学フェローシップの詳細はウェブサイトへ。
http://ryu-fellow.org